

昨年夏に子供三人とフィレンツェへフランス経由で行った。イタリアへ行くと言ったからフランス人は口を揃えて、イタリアでは気をつける、泥棒ばかりだ、と真顔で忠告してくれた。しかし皮肉にも盗難にあったのは、リヨンの駅であり、イタリアでは何事もなかった。他は知らないが、フィレンツェは予想を遙かに越えてまったく安全な街だったのである。深夜2時3時まで街を徘徊して、楽しんだ。

初めてのイタリア、初めてのフィレンツェだったが、30年前入学した大学がルネサンス美術研究が中心で、また当時イタリア語初級を教わったのがその後、パロツク、マニエリスム研究で有名になる若桑みどり氏であったことを思えば、フィレンツェ行きは遅きに失したといふべきだろう。一年上に在学していたのが、ヴァザ

ーリョルネサンス彫刻家建築家列伝(白水社)の監訳者である森田義之だった。ウフィツィ美術館に行つてはつきりしたのは、遅きもなにも、ルネサンスはまるで性にあわないという

私が愛した

ことである。性にあわないどころかげんなりさせられたのだ。ミケランジェロの家へ行き、彼の絵を見ると、そのへたくそなことにあきれた。彫刻はさすがに完璧だが、

中世からの落差には目眩がするとしても、ルネサンス称讃はとてつもない美術史的陰謀ではないか、の暴言すら吐きたくなるほどだった。ウフィツィで唯一、視覚的にも描かれた内容としても楽しんだのが、カラヴァッジョの小品『パッカス』というのは悲しい。これを見た瞬間、思わず声をあげて笑ってしまった。

なにやら、パッカスの珍妙な化粧顔がウフィツィの他の作品を小馬鹿にしているかのように見えたのだ。ルネサンスのシリアスな絵画探究全体を転倒させるかのようなパロツクな逸品。カラヴァッジョは自分の才気への確信から、他の画家を全否定していたから、この解釈には狂喜して短刀を筆者に突き立てるかもしれない。

「あっ、お父さん、この人小指立ててるよ」
中学1年生の娘も嬉しそうに反応する。「眉描いてるね、頬紅塗りすぎじゃない?」
違和感は、顔の幼さと半裸体の肩、腕の筋肉の逞しさのアンバランス、そしてこの腕



にぶつくらとした手がついてい

景は暗く色彩を沈ませてい

ルズ・マンソンだった。シャ

カラヴァッジョ

滝本 誠
Makoto Takimoto

ヨの名前はようやく知られは

美人だがフェロモンの

「ラザロの蘇生」制作秘

このアートへのしび

きた理由は事欠かない。

筆者の好みはケウン・スベ

映画は解説するが、これはま

めくつての警察との丁々発止

描く波瀾万丈の生涯

好評既刊
カラヴァッジョ
灼熱の生涯
デズモンド・スアード 著
石鍋真澄、石鍋真理子 訳
マニエリスムの巨匠カラヴァッジョ。彼はその特異な性格ゆえに数奇な一生を送つたことと知られている。最新の史料と研究をもとに描く波瀾万丈の生涯。
本体2800円

愛書狂

次男が都内に下宿して、二階の部屋が一つ空いたので、そこを三番目の書齋として使うことにした。十二年前に家を建てたときに作った書齋は十六畳、天井高2m60の壁面を全部作り付けの本棚にしたところが、引越したとたんにこれも満杯になったので、屋根裏を改造して第二の書齋を作った。しかし、屋根裏だと壁面が斜めなので本棚を置くには適していない。おかげで、本は階段を半分塞ぎ、さらには玄関も居間もトイレも占拠して、文字通り、足の踏み場もなくなくなった。そんなところにもつてきて部屋がまるまる一つ空いたのである。本がここになだれこまないわけはない。高さ2m10の本棚を買ってきて、その上にもう一つ小さな本棚を置いて天井まで塞いだ。さあ、これでかなり本を詰められるぞと思つたが、ここで少し考えた。いつものように片端から本を二重に詰め込むと、奥に入った本は一度と出てこない。しかし、二重詰めを回避するほどの余裕もない。ならば、どのような本を奥に入れるかそれを熟慮すべきではなからうか。まず自著。おのおの一冊だけを取り出せるようにしておき、残りは奥詰めにする。次に個人全集。これはめつたに読むものではなく、場所さえわかっているればよい。雑誌のバックナンバーも右に同じ。書評済みの本も奥詰め。また、すでに一冊本を書き上げてしまった資料も、こう考えてみると、意外に奥詰めしてもかまわない本というのが多いことがわかった。だが、だからといって、これらの本を捨ててしまつことはできない。書齋の無限肥大の元凶(ここ)にあり、でもこの元凶、突き止めたからといって、どこにかなるものでもないんだよね(鹿)

「言葉による罪」とは何か

「冒瀆の歴史 言葉の多面に見る近代ヨーロッパ」
アラン・カバントゥ「著」



神を冒瀆する言葉とそれについて
政治・宗教権力の対応の変遷をたどり、この「言葉による罪」を手がかりに近代ヨーロッパ社会の構造を読み解く試みである。

十六世紀以降にキリスト教の呪縛が薄れて社会が「世俗化」してゆき、瀆神の罪が遠景にのぼり、ついに「たは事実だが、著者はそうした凡庸な見取り図だけでは満足しない。例えば時代が下って革命期、この時期の「世俗化」が、革命の理念に反するさまざまな言動を、あたかもキリスト教をモデルにしているかのよう」に「瀆神」に仕立てあげてゆく様を活写する。共和国という宗教を認めない危険分子を攻撃する際に「冒瀆的」という表現がしきりに用いられたのである。

本書は「冒瀆」を通じて人々が「聖なるもの」を文化的・宗教的にどう捉えていたかをあぶり出すことに見事に成功した。(平野隆文訳 四六判 四四四頁 本体四三〇〇円)

西欧文明の源流を探る

「古代ギリシア人 自己と他者の肖像」
ポール・カートリッジ「著」

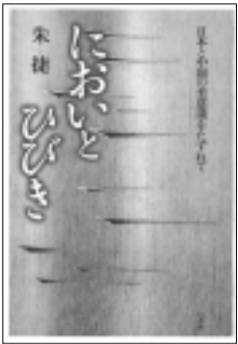


私たち現代人にとって最も基本的な概念となつていくもの多くは、その原形をたどると古代ギリシア人によって発明されたものである。たとえば、民主主義、演劇、哲学、そして歴史といったものがそれである。しかしながら著者のカートリッジは、現代人とギリシア人との間には決定的な違いがあると考える。彼はギリシア人の自己認識のありかたを、自己と他者との二極対立(ギリシア人対異民族、男性対女性、(橋場弘訳 四六判 三三八頁 本体三八〇〇円))の思考の枠組み

によるものと捉える。しかもこれら二極対立は、どれも対等な関係ではなく、つねに自己が優位に立つという不均衡なものであった。そして豊富な例をあげつつ、古代ギリシア人は近代人にとって決定的に他者であることと結論づけたうえで、近代西欧文明と古代ギリシア文明を容易に重ね合わせる誤りを指摘し、他者の排除こそがギリシア文明成立の基本条件であったと締めくくっている。

玉三郎が、竹林の七賢人が

「におひびき」
日本と中国の美意識をたずねて」
朱捷「著」



著者は上海出身の比較文学・比較文化学者。日本で暮らすうちに「におひびき」という言葉が気になりはじめたという。そのエッセイに「玉三郎はいつつうちに美しい」とあった。「おひびき」は遠く源氏物語でも人間の内在的な魅力に対して用いられ、高貴な出自以上に重視されている。視覚上の美や人物評価になぜか嗅覚の言葉が使われているのが独特だ。

面白いことに、「匂」という字は平安末期に作られた和製漢字だった。しかも何と、嗅覚を表す漢字は沢山あるのに、わざわざ「ひびき」を示す聴覚の文字を元に作られていたの

奇妙なラブアタック!

「恋愛戯曲」
鴻上尚史「作」



「ひびき」を留意する「韻」がとりわけ人物を高く評価する言葉となりはじめ、唐代では琴棋書画に関しても広がっていた。ここには古代中国における音楽をどうみるかという背景があり、その音楽＝宇宙の和を聴き取る聴覚が重視されていたのである。本書は甲骨文字、神獣鏡、孔子、老荘、竹林の七賢人、源氏、芭蕉、白秋、歌外等々を引きながら、日中の伝統文化における美意識の特質を明らかにし、両者がめざす人物像の決定的な差異を鮮やかに開示する。異色の文化論であり、読書人必読の好個の読み物である。(四六判 二二二頁 本体二二〇〇円)

『小説の技巧』を凝らした最新長篇!

「考える…」
デイヴィッド・ロジ「作」



主人公は、「心はコンピュータみたいなもの」と信じるメッセンジャーと、AIと認知科学の大学教授と信じるヘレン・メッセンジャーと、同じ大学の創作科で一学期間だけ講師を務める。甘い生活に浸るふたりの人生にも、大きな転機が訪れる……科学と文学、「心」を捉えることができるのはどちらなのか? メッセンジャーはヘレンをなんともものにしてアブローチをキャンパス・コミック・ノベルであり、随所に斬新な知的仕掛けを施しながら、極上のエンタテインメントに仕上がっている。(高儀進訳 四六判 四二八頁 本体二六〇〇円)

第一級の犯罪小説

「切り裂き魔「ゴレム」」
ピーター・アクロイド「作」



ヴィクトリア朝ロンドンの猟奇殺人といえば、かの「切り裂き魔」があまりにも有名だが、この小説は、それより八年前の酸鼻極まる連続殺人を主題にしている。ただしそこは現代イギリスの結核するが、本書の一部はその夫の不気味な殺人日記からなっている。日記には恐ろしい口で娼婦らを惨殺していく様が細かに述べられていた。同じ頃、大英博物館の読書室にはあのカール・マルクスや作家のジョージ・ギッシングが集っており、彼らにもこの連続殺人の嫌疑がかかる。ロンドンの芸人世界と連続殺人と学者の眼が渾然となつて、事件は思いがけない結末を迎える。英国読書界絶賛の傑作犯罪小説。(池田栄一訳 四六判 二九六頁 本体二四〇〇円)

レマルクをはるかに超える傑作

【書評再録】評者「富山太佳夫」
戦場の一年

エミリオ・ルッス「著」柴野均「訳」
四六判 258頁 本体2500円



戦争を忘れることはできない。それに直接関わった人々にとつても、あるいは間接的にしか関わらなかった人々にとつても、その意味では、人間の歴史は戦争のための記憶遺産だと言つていいのかもしれない。エミリオ・ルッスの『戦場の一年』(一九三八年)もその一冊である。これは間違いなく、たしかにそうなのだが、何と云って紹介したらいいのだろうか。この本は書評を越えていく。この本が今まで翻訳されなかったという自体が、イタリア文学の翻訳史上の汚点である。この日本語訳がいくつも出版社から断られて、やっとこの目を見るにいたつたということ自体が、この国の出版制度上の汚点であると言つていい。

戦争を描いた傑作になるといつかは深い矛盾であるが、『戦場の一年』はそういう形を許さない。これは第一次大戦を描いた傑作、しかもスバ抜けた傑作である。レマルクやヘミングウェイの遠く及ぶところではない。戦争を描いた傑作といつても、ひとつには、戦争の悲惨さが十分に描かれているといつてもいいが、『戦場の一年』はたしかにそういう一面ももっている。この作品は一九一六年六月からほぼ一年間にわたつて、下級将校ルッスが体験したことの記録である。名前こそ変えてあるものの、実録に近いという、舞台となるのは、オーストリア国境での動盪戦、第一次大戦のときの塹壕戦の悲惨さについてはよく知られているが、この作品にもそれは刻明に描かれている。その描き方が客観的な戦術的な説明となるのではなく、下級将校の眼に映つたひとつひとつの事実として描かれてゆくだけに、逆に迫真力をもつてくるのだ。

ここに描かれているのは国家や軍隊や規律をめぐり、思想的考察ではなく、ひとつひとつの突撃と負傷である。しばしば淡々とした筆致だ。ヒューマンイズムではひとを救つてなどではしなない。作者はそれを痛感しているからこそ、ひたすら事件とエピソードを書き込むのだ。「これはわたしに参加した戦争の四年間のうちの一年に限って個人的な思い出を綴つたものである。わたしは自分の目で見ただけのもので、そしてわたしの心に強く残つたことしか書かなかつた。無名の兵隊を記憶に残すための唯一の手段は、個人的な思い出である。それ以外にはない。」

そのような「個人的な思い出」の中に残るのはヒューマンイズムでも、エモーションでもなく、どうしようもない冗談であったり、やせとてであったり、上司へのきりぎりの反抗であったり、勇気と呼べることもない勇気であったりする。すべては戦場で起きた具体的な出来事なのだ。そのために、逆に、この本からいすれば、エミリオ・ルッスが体験したことの記録である。名前こそ変えてあるものの、実録に近いという、舞台となるのは、オーストリア国境での動盪戦、第一次大戦のときの塹壕戦の悲惨さについてはよく知られているが、この作品にもそれは刻明に描かれている。その描き方が客観的な戦術的な説明となるのではなく、下級将校の眼に映つたひとつひとつの事実として描かれてゆくだけに、逆に迫真力をもつてくるのだ。ここに描かれているのは上級将校たちではない。ここに描かれているのは上級将校たちの無知と判断ミスと横暴な愚行である。(毎日新聞平成十三年七月十五日誌評)

「白水Uブックス1050」道化の目

小田島雄志「著」

「よく芝居に行く人、芝居好き、観劇家」のことをシアター・ゴアアという。本書は、そのシアター・ゴアアの著者が、折りに触れ発表してきたエッセイをテーマ別にまとめたものである。内容は、「劇場で……」「私の好きな……」「思い出の……」の三部構成。それぞれが、興味深い読み物となっている。この本に充満しているのは、「人間がこころも美しいとは！ ああ、すばらしい新世界だわ。こういう人

「白水Uブックス1051」和数考

郡司正勝「著」

日本の数には不思議な意味がある。「おひとつどうぞ」と酒をすすめられても、それは一杯は呑んでもいいが二杯ははいけないということにはならない。しかも「おひとつどうぞ」とは言わず「もうひとついかが」とすすめる。一はそれだけで二とは続かない。つまり数えられない「数」である。一方、「二」は「二の次」とか「男ふりは二の町なれど」などとさげすまれる。負の意味を背負った数とい

「白水Uブックス1052」満ち足りた人生

別役 実「著」

人生、一寸先は闇といふ。本書は、「誕生」から「葬式」までの、ごく一般的な生涯で出会う、「ごく一般的な出来事」を四十四項目取り上げ、シニカルかつユーモアにあふれた文体で綴る。「別役流・人生読本」。取り上げた「喫煙」「入院」「就職」「交際」「結婚」「出産」「借金」「離婚」などは、われわれが日常さりげなく経験(体験)している、おなじみのものばかり。本文中に述べられているポイントさえ押さえておけ

たちがいるとは！」と、『テンペスト』(シェイクスピア作)の台詞にあるように、人と出会うことの素晴らしさとあらゆるものに感動し、つねに新鮮な気持ちをもつ喜びだ。シェイクスピアをこよなく愛し、シェイクスピアの戯曲三十七本を翻訳した著者ならではの、一冊といえるだろう。

える。一の次が二のではない。福沢諭吉は長男を太郎、次男を捨次郎と名付けたが、これは特別な例ではなく、次男以下は「二番生」といわれるほどだった。このように本書は日本人の心の奥深く、かすかな記憶となつて存在する「数」に隠された意味を一から十までたどり、異界からの記号を呼び起こす、不思議な一冊である。

ば、「満ち足りた人生」を過ごす有資格者だ、と著者は言う。ともあれ、含蓄ある文章とユニークな内容で展開する本書は、どの項目から読んでも、どのページを開いても、おもわずニヤリとしたり、うなずいたりすること請け合い。「コクがあり、キレのある」人生を期待する人に贈る必読本。

(新書判 一九〇頁 本体八八〇円)

文庫クセジュ

「0842」

「モロ諸島」

エルヴェ・シャニユー、アリ・ハリフ「著」

アフリカ大陸とマダガスカル島に挟まれた、モザンビーク海峡の北の入口に浮かぶ四つの小さな島々。「生きた化石」シラカンスで名高いモロ諸島。本書は、その知られざる魅力を紹介するため、異国情緒をかきたててやまない地理・自然環境と島の歴史を詳しく語り、「モロ社会を描き出してゆく。フランスの植民地時代には「香料の島」と称され、いまや「クーデターの島」と呼ばれる。このモロ諸島の社会背景を読むことは、アフリカ諸国や他の旧植民地国家が陥っている複雑な状況を理解する上でも、必ずや、重要な示唆を多く与えてくれるだろう。」

(花洲書也訳 新書判 一八六頁 本体九五一円)

「0843」

「ラテン語の歴史」

ジャクリヌタンジェル「著」

ヨーロッパで古くから愛されてきた「効率のよい言語」ラテン語をめぐり、その誕生と繁栄から衰退、そしてロマンス諸語の輩出ぶりについて歴史を掘り下げながら、強く、論理的で、ダイナミックな体系が形作られてゆくさまを概説してゆく。ラテン系の言語民族の心性に根づいた思考形式が、わかる。本書の著者は、現在、パリ第四大学(ソルボンヌ)にてラテン語の文法論・韻律論を講じている(文法学の教授資格取得者にして国家博士)。ラテン散文・韻文についての理論的・美学的なエッセイも数多くものしている研究者である。(遠山一郎・高田大介訳 新書判 一七六頁 本体九五一円)

編集メモ

右手に赤ボールペンを持ち、ペン先で校正グラの文章を追う。左側に置いた原稿を、人差し指で指さしながらグラの文章と合わせて、視線は行ったり来たり。や、眠くなってきた。熱いお茶を飲んでもうひとふんばりしよう。原稿とグラのツキアワセ。いまワープロ原稿の普及でこの作業は姿を消しつつある。かつて手書き原稿にはミミズがのたくった筆跡もけっこうあり、植字工の方が一字一字

営 業 部 だ よ り

夏は暑いほど物がよく売れるという。先日テレビのニュースを見ていたところ、飲料系はもちろん衣料品関係も前月を上回る売行きだったそう。替えの洋服が必要だ、強い日差しを避けるための日傘や帽子が欲しい、など理由はさまざま。だが店舗側も売上を気温に依存しているだけではないようだ。1日のうちどの時間に客が集中するか、気温が何度かどのような商品がよく売れるのか、そういう細かいデータをもとに販売計画を立て、目に付くような陳

【お願】 住所表記が変更になりましたら、御名前、新住所・旧住所、お届けいたしております本紙のお客さまコードをお知らせください。

本の十字路

おもにホラー&ポルノ系の新刊に多いようだが、一風変わった読み方をすすめるタイトルが目につき、つい手に取って確認することがある。おもむきは、だいたい違つものの、古山高麗雄氏の旧作『プレオの夜明け』は8をフランス語でユニットと読ませる(上とセットで中庭8号の意)。同世代の安岡章太郎氏の『海辺の光景』は、死にゆく母に寄り添った胸苦しい名作ゆえ、「かいへん」と読ませるのがいいのではい

限定復刊/少部数重版

表示価格は税別です。別途に消費税が加算されます。

白水社の本棚

101-0052 東京都千代田区神田小川町3-24 / 振替00190-5-33228 / 電話03-3291-7811 / http://www.hakusuisha.co.jp

少部数重版

希望の原理【全3巻】

エルンスト・ブロッホ著「山下肇・他ノ訳」 A5判/平均六八二頁 各巻本体一〇,〇〇〇円 初版一九八二年

「希望の百科事典」と称される畢生の名著

- 全巻内容
第1部(報告) 小さな昼の夢
第2部(基礎づけ) 先取りする意識
第3部(移行) 鏡のなかの願望像
第4部(構成) よりよい世界の見取図
第5部(同一性) 満たされた瞬間の願望像

限定復刊

限定700セット・10月下旬刊/予約受付中 『ベルグソン全集』デカルト著作集は分売いたしません。予約が満数になり次第、締め切らせていただきますので、お早めにお申し込みください。いずれも一九九三年に限定復刊されましたが、刊行早々に売り切れとなりご迷惑をおかけしました。ここに再度の復刊を行います。

ベルグソン全集

【全9巻】 初版一九五五年〜一九六六年 四六判/平均三五四頁 セット本体三八,〇〇〇円

- 全巻内容
時間と自由 精神のエネルギー
アリストテレスの場所論 道徳と宗教の二源泉
物質と記憶 思想と動くもの
笑い/持続と同時性 小論集
創造的進化 小論集

デカルト著作集

【増補版/全4巻】 初版一九七二年 A5判/平均五二〇頁 セット本体三〇,〇〇〇円

- 全巻内容
方法序説/試論「屈折光学」「気象学」「幾何学」
省察/反論と答弁「1」6
哲学原理/情念論/書簡集
精神指導の規則/宇宙論/人間論/真理の探求
ピュルマンとの対話/平和の訪れ(舞踊劇)
思索私記/音楽提要/掲帖文書への覚え書